

## 第I部 イノベーションとは何か

### 第1章 はじめに 26

### 第2章 資本主義、社会主義、技術進歩 29

- 2.1 1917年以降の革命的な新製品 29
- 2.2 先駆者への追従、イノベーションの伝播 33
- 2.3 資本主義下で革新的企業家精神は発揮できない 34
- 2.4 社会主義下で革新的企業家精神は発揮できない 41
- 2.5 政治的要因が技術進歩に与える影響 46
- 2.6 システムと技術進歩——本章のまとめ 47

### 第3章 技術進歩の転換と加速 52

- 3.1 新しい革新的企業家の事例 52
- 3.2 後追いと普及の加速 55
- 3.3 体制移行期における創造的破壊 59

### 第4章 人は歴史的事実をどう受けとめるか 65

- 4.1 イノベーションは資本主義の結果と理解されない 65
- 4.2 経済学者の責務とは 68
- 4.3 政治家の責務とは 70
- 4.4 相互接続性と民主主義は関連する 72

### 第5章 おわりに 77

## 第II部 不足経済と余剰経済

### 第1章 はじめに 80

- 1.1 資本主義は余剰経済なのか 80
- 1.2 概念明確化への最初のアプローチ 82
- 1.3 経済学において本論が占める位置 83
- 1.4 問題の境界と構造——本論の構成 85

### 第2章 財とサービスの市場——余剰の再生産メカニズム 87

- 2.1 経済史からの事例——アメリカ合衆国の電信システム 87
- 2.2 供給におけるプロセス 91
- 2.3 需要におけるプロセス 98
- 2.4 価格決定におけるプロセス 100

### 第3章 財とサービスの市場——概念装置と測定手法 104

- 3.1 「純粋」で扱いやすい事例 104
- 3.2 第一の困難——供給と需要の継続的な相互調整 109
- 3.3 第二の困難——超過供給と超過需要との同時発生 113
- 3.4 転換——生産の障害とミクロの制約を観察する 114
- 3.5 第三の困難——「余分な」在庫から「必要な」在庫を区分する 117
- 3.6 第四の困難——正当ではない集計 120
- 3.7 測定と概念装置のための実践的な示唆 122
- 3.8 合成指標と「混合指標」の形成 123

### 第4章 労働市場——余剰再生産のためのメカニズム 127

- 4.1 概念明確化と測定 127
- 4.2 システムの変化がもたらす労働市場へのショック 131
- 4.3 「ケインズ学派」における失業 135
- 4.4 資本主義にはらむ構造的失業 138
- 4.5 調整のミスマッチによる摩擦的失業 140
- 4.6 効率賃金の意味 143

### 第5章 実証的な説明と因果分析 148

- 5.1 「均衡」概念の限界 148
- 5.2 非対称性の意義 153
- 5.3 2つの需要——供給レジーム 155
- 5.4 資本主義システムによる余剰経済の生成——因果連鎖 160
- 5.5 遺伝的な傾向 165

### 第6章 余剰経済の効果とその評価 171

- 6.1 その影響と価値判断について 171
- 6.2 イノベーション 171
- 6.3 消費者の主権とコントロールの範囲 173
- 6.4 生産性と調整 175
- 6.5 適応力 175
- 6.6 所得と富の分配 176
- 6.7 「物質的」価値と「精神的」価値 177

6.8	汚職の方向性の違い	178
6.9	資本主義的競争の利点と欠点——自動車産業の例を通して	179
6.10	資本主義と余剰経済に賛成する立場	182
6.11	理論的統合への余地とその制約	185
6.12	説得力ある数理モデルへの需要	188

## 第7章 一般的図式からの応用 193

7.1	景気循環の変動において	193
7.2	戦時経済において	199
7.3	現代資本主義における歴史的变化と持続	200
7.4	社会主義国の市場志向の改革とポスト社会主義への移行	209

## 第8章 おわりに 213

### 補論1 自由, 平等, 博愛——社会主義体制崩壊以後の変化の考察 220

1	はじめに	220
2	自由	220
3	平等	222
4	博愛	225
5	展望	228

### 補論2 一人の東欧知識人の目に映るマルクス 230

1	はじめに	230
2	マルクスに引き寄せたもの	231
3	マルクスの思想から解放されたもの	232
4	社会主義体制に対する知的責任	233
5	マルクスの教えのうちで生き残るもの	235

### 訳者あとがき 237

### 参考文献 247

### 索引 260

## 日本語版への序文

本書のオリジナルとなるハンガリー語の書物を刊行した後、私はゾダベストのゴルゼイヌス大学で学部生向けに一連の講義を行ってきた。この講義では、本書で提示した主張に光を当てようと工夫した。「不足経済」の概念を描くために、ポーランドとソ連で撮影された写真を映しだし、人々が食料品の購入を待つ果てしない行列や空っぽの店棚を描いて見せた。対照的に、「余剰経済」を指し示すために、これまで何回か訪れた東京で撮影した短いビデオを見せた。巨大なショッピングモールの1階を歩く妻の姿が映しだされたのだが、棚の列という列が競い合うように大量の商品で溢れかえり、無限に溢れるようであった。棚のそばには店員が立ち、妻が通り過ぎるたびに、礼儀正しくお辞儀をする。もちろん、妻が実際には何も買っていないとまだ、この2つのイメージで、私は大学生たちに、2つの異なる市場の状態ではなく、2つの異なる社会条件、2つのシステムの型を描きだそうと試みたのだ。一方では、客は店員に従属するのだが、他方では店員が買手にお辞儀をする。

本書はこうした2つの状況を描き、分析しようとするものであり、日本の読者にとっても有用であろう。本書は多様な形態であらわれる現象と結果のルーツを詳細に論じている。特定の国を詳細に述べるわけではなく、社会主義システムと資本主義システムの概括的な説明を行おうとするものである。多くの諸国にかんするデータを指し示している表のなかで日本も扱っているが、他のいかなる国とも異なる日本のユニークな特徴を論じているわけではない。が、日本の読者が最後まで読み進められたとき、「そのとおりだ。本書が導く資本主義の特徴は日本にも通ずる」と思っていただけだと考えている。

ハンガリー語のオリジナル版でも、各国語の翻訳版でも、もちろん日本語版でも、私は若い世代に、上級レベルのコースで勉強している大学生に届くことを狙いとしている。彼らの多くが、批判的な目でシラバスを読み、選択肢となる理論や異説も知ることができると確信している。